

偽りの記憶に及ぼす警告の効果

- 偽りの記憶の生起を防ぐことは可能か？ -

北 神 慎 司 ・ 遠 藤 正 雄

(京都大学教育学研究科)

【目的】

Roediger & McDermott(1995)の研究以来、単語リストによる偽りの記憶研究が盛んに行われてきている。この流れを受けて、Gallo, Roberts & Seamon(1997)では、学習リスト呈示前に被験者に偽りの記憶に関する警告的な教示を与えると、再認テストにおいてCL(critical lures)の再生率、つまり、虚再生率が減少することが示されている。そこで、本研究では、このような教示の効果が再生テストにおいても見られるかどうか、すなわち、学習前に、被験者に対して、偽りの記憶に関する警告的な教示を与えることによって、虚再生率が減少しうるかどうかを検討する。

【方法】

デザインと被験者: 警告(あり・なし:被験者間) × 単語(呈示語・CL:被験者内)の2要因計画。大学生22名を2群に割り振った。

材料: 宮地(1997)で使用されたリスト12個。各リストは、15個の単語からなり、各単語はそれぞれ、CLを連想させるものであった。また、再認テストとして、全てのリストの1・8・10・15番目の単語とCLとが、再認テスト項目として用いられた。

手続き: 実験は全て個別により行われた。警告あり条件の被験者に対しては、「りんごの連想語からなるこのようなリストを聞いた場合、実際には“りんご”という言葉がリストの中にない場合でも、この言葉をリストの中で聞いた単語として間違って思い出してしまうということがよくあります。そこで、これらのことに注意して、リストをじっくりと聞き、連想の元となる単語(りんご)は、間違って、思いださないようにしてください。」という教示を行った。警告なし条件の被験者に対しては、上述のような一切教示は行っていない。被験者は、練習試行の後、8個のリストをランダムな順番に聞き(リスト内の呈示順序は固定)、各リストが呈示された直後に、筆記によるリストの

再生を2分間で行うよう求められた。最後のリストに対する再生課題が終了して約5分後、全ての被験者に対して、再認テストが行われた。被験者は、パソコンの画面に単語が2秒間呈示された後、呈示された単語の新・旧判断をキー押しによって行うように求められた。さらに、被験者は、その直後、判断に対する確信度を6段階で評定するように求められた。

【結果と考察】

再生テストの結果をTable1に、再認テストの結果をTable2に示す。再生テストの結果について、2要因分散分析を行った結果、単語の主効果のみ有意であった。交互作用は有意ではなかったが、CLの再生における警告の効果を単独に見るために、単純主効果検定を行ったところ、CLに対する警告の効果に有意傾向が見られた。すなわち、リスト呈示前に、偽りの記憶について警告的な教示を与えることにより、虚再生が減少しうることが示唆された。

次に、再認テストの結果について、2要因分散分析を行った結果、単語の主効果および交互作用が有意であった。さらに、単純主効果検定の結果、CLに対する警告の効果が有意であった。これらの結果は、当然のごとく、再生テストの結果とほぼ同様のものではあった。

以上のように、警告的な教示は、虚再生を減少させる効果をもつことが示されたが、いくら警告をしても、虚再生は0にはならないという結果も重要であると考えられる。つまり、単語リストによる創られた偽りの記憶は非常に頑健であることを示す結果でもありとえられる。

Table 1 Recall Results for Studied Items and CL

	Studied	CL
Warning	.66(.05)	.39(.23)
Non-warning	.63(.08)	.50(.15)

Table 2 Recognition Results for Studied Items and CL

	Warning	Non-warning
Studied		
Study+recall	.76(.08)	.72(.13)
Nonstudied(F.A.)	.33(.13)	.34(.18)
CL		
Study+recall	.59(.20)	.74(.17)
Nonstudied(F.A.)	.16(.17)	.16(.13)